隋末唐初における金陵と文学

～「王気」の帰趨をめぐって

寺尾　剛

一、序～李白に至るまでの唐代金陵詩史

隋の開皇九（五八九）年春正月、陳の後主叔宝は景陽殿内の井戸の中に潜伏していたところ、隋軍によってあえなく捕縛された。ここに三百年近くにわたる南北分裂の時代は終結した。同時に、三国・呉の都として出発した国都・金陵（江蘇省南京市。以下、原則として美称である金陵という呼称を用いる）も、その南方諸王朝の政治的中心地としての役割を終えることになる。

史書の記述を見る限り、隋軍の金陵破壊は、梁末の侯景の乱（五四八年勃発）の際ほどにはひどくはなかったようであるが、『隋書』「地理志・下」「丹陽郡」の条に「平陳、詔並平蕩耕墾、更於石頭城置蔣州。」とあり、同「五行志・下」に「及陳亡、建康為墟。」とあり、また『資治通鑑』「隋紀一」「文帝開皇九年」にも「於是陳国皆平。……詔建康城邑宮室、並平蕩耕墾、更於石頭置蔣州。」とあるように、隋の文帝は、戦後処理の段階で陳の宮殿群を徹底的に破壊したようである。その破壊の理由として、盧海鳴『六朝都城』（南京出版社、二〇〇二年）第二章「建康的規劃・営建与布局」（P六五）では、「建康の政治的・軍事的地位を削り弱め、建康の王気を破壊排除し、建康の世人心目中にある影響を取り除き、王朝復

活を杜絶覆滅せんがため」と推測する。金陵の持つ政治的・軍事的重要度以外に、その「王気」を有するという象徴的意味合いにも着目している点、留意してよい指摘である。

さて陳王朝滅亡後、隋から唐初にかけての金陵はどのような変遷をたどってきたのだろうか。唐代金陵詩史を俯瞰してみた場合、盛唐の李白（七〇一～七六二）が爆発的に大量の金陵関係の詩歌を残し[1]、以後、中唐から晩唐にかけて、劉禹錫「石頭城」「烏衣巷」・杜牧「江南春」「泊秦淮」・許渾「金陵懐古」・李商隠「南朝」・陸亀蒙「景陽宮井」・韋荘「台城」など傑出した金陵詩が継続的に産み出されてゆく。それはやがて宋代以降、いわゆる〈金陵懐古〉のテーマとして詩詞の世界に確固たる地位を占めてゆくことになる。しかし、隋代から李白にいたるまでのおよそ百数十年、金陵は懐古詩の格好の舞台となりうるであろうと予想されるにもかかわらず、そしてまた、すでに六朝時代に数多く歌われてきたという長い文学的伝統を有する都市であるにもかかわらず、それほど唐代詩人たちの注目を集めてはいない。

本稿は、あえてこの百年余の「空白期」に着目し、その時期をいわば金陵詩史における胚胎期として位置づけようと試みるものである。なぜ李白に至るまでの間、金陵は詩歌の舞台として注目されなかったのか。別の言い方をすれば、詩人たちが金陵を回避せざるを得ない、何らかの政治的な意図（金陵抑制策）が存していたのか。その点について、特に「金陵王気」という問題に留意しつつ論じていくことにしたい。

二、隋から唐初にかけての金陵～「王気」の帰趨

前節にも触れたように、隋は陳を滅ぼした後、開皇九（五八九）年、東晋以来の丹陽郡（隋以前は「丹楊」と表記。隋代は国姓「楊」と同字であることを避け「陽」と表記。以後「陽」を用いるのが一般的になるので[2]、本稿も原則として「陽」字に統一する）を廃し、金陵西端の石頭城に蔣州を置いた。石頭城はもと呉の孫権が建都する以前に、長江沿いにある石

頭山に築いた軍事的性格の強い砦。[3] 六朝期の皇帝居所である建康宮の遥か西にある。隋の文帝は六朝の宮殿たる建康宮を破壊した後、ここに行政の中心部を移したわけである。一種の金陵抑制政策と言えるであろう。ちなみに金陵の中心部を領する江寧県の治所も翌開皇十年、冶城（石頭城の東南）の東に移されている（『太平寰宇記』「昇州・江寧県」）。

文帝を継いだ煬帝は、大業三（六〇七）年、州制を廃して郡制を敷き、この地も丹陽郡に復する。煬帝と言えば、大運河の開鑿とそれに伴う揚州巡遊が史実として著名である。これは隋唐時代を通じての金陵衰退の歴史を考えた場合、特に重要であろう。大運河の完成によって、金陵の政治的・軍事的・経済的地位は長江と大運河との接点となる揚州（江蘇省揚州市）・潤州（京口。江蘇省鎮江市）に譲らざるを得なくなり、これが江南地区（特に江蘇省南部）における金陵の地位の相対的な低下に拍車をかけたと見るのが通説である。しかし、ここで注目すべきは、当初、父・文帝の金陵抑制策を継承していたと覚しき煬帝も、揚州での享楽的な生活を続ける中、各地で反乱が起こり、隋王朝そのものの存続が危ぶまれる段階になると、金陵遷都を強行しようとしたという事実である。

『隋書』「帝紀・煬帝・下」に「（大業十三年）十一月丙辰……上起宮丹楊（ここでは金陵を意味する）、将遜于江左。」とあり、『資治通鑑』「唐紀一」「高祖武徳元年」に「帝見中原已乱、無心北帰。欲都丹陽（胡三省注に「帝改蔣州為丹陽郡、蓋欲都建康也。」とある）、保據江東、命群臣廷議之。」とある。『資治通鑑』に拠れば、その際、李桐客が「江東卑濕、土地険狭、内奉万乗、外給三軍、民不堪命、恐亦将散乱耳。」と反対したが退けられたため、結局、公卿らは煬帝に対して「江東之民望幸已久、陛下過江、撫而臨之、此大禹之事也。」と上奏して、煬帝におもねることしかできなかった。かくて煬帝は「乃命治丹陽宮、将徙都之。」という決定を下す。しかしその報が伝わるや、北方への帰還を期待していた周囲はパニック状態に陥り、離反するものも多数出て、これが遠因となってついに煬帝は暗殺されるに至るわけである。遷都決定からわずか三ヶ月後のことである。

煬帝の遷都発案の直接の理由は「時江都糧尽。」（『資治通鑑』）とあるように、揚州の疲弊であることに間違いはないで

あろう。しかしその遷都先をよりによって金陵に定めた理由は、防衛に有利（周囲を山と長江に囲まれている）であるという軍事的な意図も存していたであろうが、やはりその最大の理由は、金陵の持つ象徴性、すなわち「王気」を有する都市であるという点に帰するのが、象徴的権威を重んじる煬帝の性格から判断して、穏当であろう。

ちなみに晋王朝南遷に際して、元帝が都を金陵に決定したことについて、唐初の太宗期に編纂された『晋書』も「王気」を理由にその蓋然性を認めている。すなわち「始秦時望気者云、『五百年後金陵有天子気』、故始皇東遊以厭之、改其地曰秣陵（馬草の丘の意）、塹北山以絶其勢。及孫権之称号、自謂当之。孫盛以為始皇逮于孫氏四百三十七載、考其暦数、猶為未及。元帝之渡江也、乃五百二十六年、真人之応在于此矣。」（「元帝紀」）と記述しており（『宋書』「符瑞上」にもほぼ同様の記述がある）、唐王朝もまた金陵の「王気」を注視していたこと疑いない。

金陵の「王気」にまつわるエピソードとしては、梁の元帝が侯景の乱後、自ら長く在住していた湖北の荊州にこだわり、江陵に遷都することを臣下に図った際、「建康蓋是旧都、彫荒已極、且王気已尽。」と語り、群臣も荊南に天子の気があると追従したことが『南史』「周朗伝」に記されている。また、陳後主が、隋軍が間近に迫っているにもかかわらず金陵の「王気」を根拠に安閑としていたことも『南史』「陳本紀下」に記載がある。すなわち、「及聞隋軍臨江、後主曰、『王気在此、斉兵三度来、周兵再度至、無不摧没。虜今来者必自敗。』孔範亦言無渡江理。但奏伎縦酒、作詩不輟。」と。[4]

さて隋末から唐初にかけて、この金陵を含む江南地区（長江下流域）の混乱は続く。まず、呉興太守であった沈法興が煬帝暗殺の報を受け、首謀者・宇文化及討伐を口実に挙兵。一気に丹陽郡を始めとする江南十余郡を制圧。自ら江南道大総管となる。ついで李子通が立ち、沈法興を丹陽郡から駆逐し、江都（揚州）を都として即位。国号を呉とする（唐高祖武徳二〔六一九〕年）。この際、丹陽（当時の金陵）の賊・楽伯通が数万の軍を率いてこれに降っている。一方、長江を挟んで金陵の西に位置する歴陽（安徽省和県）に割拠していた群雄の一人・杜伏威は唐王朝に降り、和州総管の地位を得、翌武徳三年六月、呉王に封ぜられ、李姓を賜っている。この年、沈法興・李子通・杜伏威の三者が江南の覇権をめぐって

三つ巴の壮絶な戦いを繰り返すが、結局、杜伏威が親友の輔公祏（ほこうせき）の活躍もあって、最終的に勝ち残る。その杜伏威が拠点として選んだのが金陵であった。杜伏威は武徳五年七月、唐王朝に対して叛意のないことを示すために入朝し、太子太保を拝し、長安に留まることとなる。翌武徳六年七月、丹陽（当時の金陵）の留守を預かる輔公祏が杜伏威の不在に乗じて軍権を掌握し、唐王朝に対して反旗を翻す。ついで「称帝於丹陽、国号宋、修陳故宮室而居之。」（『資治通鑑』「高祖武徳六年」）とあるように、ここに、またしても金陵の持つ象徴性が利用されることになるわけである。

この際の唐王朝側の異常とまで思われる過剰な反応が興味深い。これまで江南一帯にはほとんど手を着けていなかった唐の高祖李淵は、すぐさま襄州道行台僕射であった趙郡王李孝恭、嶺南道大使であった李靖、斉州總管であった李世勣（徐世勣、李勣）等に輔公祏討伐の詔を下す。高祖はそれだけでも飽きたらず、当時太原において北方の対突厥戦線に従事していた秦王李世民（後の太宗）にも、江州道行軍元帥として輔公祏に対処するよう命じ、李世民が猶予していると、数日後にまた「詔世民引兵還。」（『資治通鑑』）とあるように、出動を急かしている。李靖、李世勣、李世民といった唐王朝統一期におけるまさにオールスターキャストをそろえた陣容と言える。

戦闘は終始、唐王朝側の優勢のまま続き、武徳七（六二四）年三月（その前の月に杜伏威は長安で薨去）、ついに李靖が丹陽（金陵）に至り、輔公祏は城を捨て東走、李世勣軍がそれを追撃した。輔公祏は結局、武康（浙江省湖州市）において野人に捕獲され、丹陽に護送されて梟首に処せられた。ここに江南一帯は完全に唐王朝の支配下に置かれることになるわけである。付言すれば、江南地区最後の梟雄・輔公祏が拠った都市が金陵であり、またその死も金陵であったことは象徴的であろう。唐王朝の江南平定が金陵制圧によって完了したのである。[5] 金陵が「王気」を有する都市であるという伝承に神経質になっていたがために、高祖李淵は輔公祏討伐に全力を傾けたのだと考えても、あながち誤りとは言えないであろう。

さて以上のように、混乱の続いた金陵地区（丹陽郡江寧県）であるが、武徳三（六二〇）年、杜伏威が唐王朝に帰順し

た際、江寧県は揚州に帰属することになり、さらに帰順を記念して帰化県に改称される。輔公祏討伐後の武徳八（六二五）年、さらに金陵県に改称。翌九年、揚州の治所は江都（揚州）に移管し、その際、金陵県は白下県に改称され（治所も『旧唐書』「地理志」によれば金陵北の「故白下城」に移管）、潤州（治所は今の鎮江市）に所属させられる。この年、揚州・潤州一帯の行政区画は大きく変更させられており、特に金陵の行政上の地位の低下は顕著である。これは唐王朝の輔公祏反乱に対する衝撃を物語ると同時に、唐王朝による金陵抑制策の実施が事実上ここから始まると考え得る行政改革でもあった。

なお、太宗時代（在位六二七～六四九）に入ってからも、若干の移動があり、貞観七（六三三年）、白下県の治所は再びもとの冶城の東に移り、さらに九年、県名も江寧県に戻っている（『旧唐書』「地理志」）。

いずれにせよ、金陵は隋代以降、唐初にいたるまで、めまぐるしく県名が変更され、所属先も極めて不安定であったこと、まさしくその動乱の時代を反映したものであったことが確認できよう。[6] また、その動乱の中で、つねに金陵の「王気」なるものが亡霊のごとく見え隠れしていたことにも注意しておきたい。

三、太宗朝における金陵～帝都長安賞揚の影に

隋代から太宗の時代に至るまで、金陵に関する詩歌はほとんど全く現存していない。江南地区の動乱に深く関わってきた李百薬（五六五～六四八）ですら、金陵に触れている作品は見当たらない。むろん三十巻あったとされる彼の作品集のほとんどが失われているわけであるから、即断はできないが、しかし彼にあっても天下の帰趨が定まっていない段階で、「王気」の復活が危惧される金陵を安易に詠じるわけにはいかなかったのではないだろうか。この時期、強いて挙げれば虞世南（五五八～六三八）に「賦得呉都」という応制の作品が存するのみである。この作品は製作年代不明であるが、李

百薬に「賦得魏都」、褚良（五六〇～六四七）に「賦得蜀都」と、いずれも紆余曲折の末に太宗配下となった宮廷詩人に同類の作品があるので（三首とも左思の「三都賦」を模したもの）、太宗時代、同時期に作成されたものと思われる。以下に「賦得呉都」の全文を挙げておく。

画野通淮泗　画野　淮・泗に通じ
星躔応斗牛　星躔（星宿）　斗・牛に応ず
玉牒宏図表　玉牒（帝譜）　宏図　表れ
黄旗美気浮　黄旗（瑞兆）　美気　浮かぶ
三分開霸業　三分　霸業を開き
万里宅神州　万里　神州を宅とす
高台臨茂苑　高台　茂苑に臨み
飛閣跨澄流　飛閣　澄流を跨ぐ
江濤如素蓋　江濤　素蓋の如く
海気似朱楼　海気　朱楼に似たり
呉趨自有楽　呉趨（呉地方の歌）　自ら楽しみ有り
還似鏡中遊　還た鏡中に遊ぶに似たり

この作品は紛れもなく建業すなわち金陵を讃える詩である。特に「黄旗」の二字は、『宋書』「符瑞上」に見える「漢世術士言、『黄旗・紫蓋（いずれも天子の象徴）、見於斗・牛之間（呉の分野）、江東有天子之気。』」という記述を踏まえるも

ので、他の王権を象徴する「玉牒」「霸業」「神州」といった語彙とともに、太宗が問題視しようと思えば、いくらでも批判の対象となりうる表現であろう。ただ、この詩はあくまで遠く三国の呉の時代の事柄に限定されており、また、左思「三都賦」を前提にしていると考えれば、この呉都の自慢話はやがて魏都支持者に言い負かされる運命にあるわけで、その意味でも、それほど目くじらを立てるに当たらないと言えなくもない。あるいは太宗はこれら三都を賛美させた後、そのすべてを凌駕する都として自らの帝都長安を賛美させようと目論んでいたのかも知れない。

さて、その太宗がいかにして金陵の「王気」を払拭し、その「王気」を我がものに転換させたのか、という点に着目してみたい。

この点に関して、まず興味を惹くのは、太宗が貞観十八（六四四）年八月に製作した（陶敏・傅璇琮著『唐五代文学編年史・初盛唐巻』〔遼海出版社、一九九八年〕の説）とされる「帝京篇」十篇である。その「序」によれば、製作動機は「予追蹤百王之末、馳心千載之下。慷慨懐古、想彼哲人。庶以堯舜之風、蕩秦漢之弊、用咸・英之曲、変爛熳之音、求之人情、不為難矣。」とあり、また「釈実求華、以人従欲、乱於大道、君子恥之。故述『帝京篇』以明雅志云爾。」とあるごとくである。いささか教訓的な口吻であるが、実際の内容は「皇帝としての日常の臨朝・読書・閲武・聴歌・観舞・遊覧・宴飲の生活情景を描写」したもので、「長安城の形勢・建築・景色の描写は十分に雄偉壮観」であるという指摘（喬象鍾・陳鉄民主編『唐代文学史・上』〔人民文学出版社、一九九五年〕p七七）が穏当であろう。帝都讃歌といった色彩が最も濃厚なのは、その第一首目であるので、まずはそれを引用してみたい。

秦川雄帝宅　秦川　帝宅　雄にして
函谷壮皇居　函谷　皇居　壮たり
綺殿千尋起　綺殿　千尋　起こり

離宮百雉余　離宮　百雉　余す
連甍遥接漢　連甍　遥かに漢に接し
飛観迥凌虚　飛観　迥かに虚を凌ぐ
雲日隠層闕　雲日　層闕に隠れ
風煙出綺疏　風煙　綺疏に出づ

極めて壮麗な帝城描写であるが、この詩は直接的には梁陳に仕えた詩人張正見の楽府「帝王所居篇」（『文苑英華』巻一九二）を意識したものと思われる。具体的には「崤函雄帝宅、宛雒壮皇居。紫微臨複道、丹水亘通渠。沈沈飛雨殿、藹藹承明廬。両宮分概日、双闕並凌虚。休気充青瑣、栄光入綺疏。……」とあって、その類似性は論を俟たない。しかしこの張正見の楽府にせよ、太宗のこの作品にせよ、その淵源を辿れば、おそらく金陵讃歌の最も著名な作品の一つ、斉の謝朓の「隋王鼓吹曲十首」中の「入朝曲」に行き着くことになろう。

江南佳麗地　江南　佳麗の地
金陵帝王州　金陵　帝王の州
逶迤帶緑水　逶迤として緑水を帯び
迢遞起朱楼　迢遞として朱楼を起こす
飛甍夾馳道　飛甍　馳道を夾み
垂楊蔭御溝　垂楊　御溝を蔭ふ
凝笳翼高蓋　凝笳　高蓋を翼し

疊鼓送華軺　疊鼓　華軺を送る
献納雲台表　雲台の表に献納すれば
功名良可收　功名　良に收む可し

謝朓のこの帝都表現法、すなわち、まず広大な帝域を提示し、ついで林立する宮殿群を描き、さらにその甍や濠など宮殿の一部や周囲に焦点を絞っていくという、いわばクローズアップの手法は、やがて帝都を歌う詩の定番となっていく。帝都讃歌に当たって同様の手法を用いている太宗が、この著名詩人の代表作を意識していなかったとは考え難い。むしろ、この謝朓の描いた帝都金陵（あるいはその「王気」）を覆い尽くし、超越せんがために「帝京篇」を書いたのではないかと推察されるのである（篇数も同じく十篇）。むろん同様に、あえて張正見「帝王所居篇」を模倣して見せたのも、その描くところの後漢の両都「宛（南陽）」「雒（洛陽）」をも凌駕しようと意図したのではあるまいか。

付言すれば、『旧唐書』「李百薬伝」に「太宗嘗制『帝京篇』、命百薬並作。上歎其工、手詔曰、「卿何身之老而才之壮、何歯之宿而意之新乎。」」とあるように、太宗が「帝京篇」を制作した際、李百薬にも唱和するよう命じたと言う点も、極めて興味深い（作品そのものは散佚）。李百薬は、陳朝下に育ち、隋の文帝・煬帝、さらには江南の群雄たる沈法興・李子通・杜伏威・輔公祏に転々と仕え、唐に入ってからは高祖に憎まれ左遷されていたところを、太宗によって拾われたという、江南を中心に波瀾万丈の前半生を送った詩人である。その、六朝文化を熟知する人物たる李百薬に、あえて長安を讃歌するよう命じていることからも、この「帝京篇」製作の意図が垣間見えるであろう。まさに太宗にとって、「王気」が金陵から長安へと完全に移転したことを確認することこそが、「帝京篇」製作の隠された意図だったと推測できるのである。

むろん定評あるところであるが、太宗は一方で文壇の南北融和にも努めた皇帝であった。[7] 貞観時代における太宗側近の代表的宮廷詩人と言えば、李百薬・虞世南・褚亮（五六〇～六四七、子に褚遂良がいる）・許敬宗（五九二～六七二）・上

官儀（六〇八頃～六六四）らであるが、李百薬は原籍は北方（河北省定州）とは言うものの、上述のように基本的に陳朝下に育った人物であり、また虞世南は杭州余姚（浙江省余姚）の人。陳朝・隋朝の遺臣で、陳朝下では顧野王に学問を学んだ経験を持つ。また褚亮も杭州銭塘（浙江省杭州）の人。陳朝・隋朝の遺臣で、かつ陳の徐陵に文学を学び、陳後主にも謁見した経験のある人物である。許敬宗も杭州新城（浙江省富陽）の人で、家は代々南朝に仕え、本人も隋末に煬帝に仕えている。上官儀のみが陝州陝県（河南省陝県）の人で、北方出身ということになる。以上のように太宗は文学的には、むしろ南朝側出身者を優遇しており、彼の作品の多くも、後世、斉梁体の遺風を色濃く残し「浮靡」「頽靡」であるなどと批判されている[8]ように、南朝文学を決して軽んじてはいなかった。それは『貞観政要』「礼楽」に見えるエピソード、すなわち建国の功臣の一人である杜淹が「前代興亡、実由於楽。陳将亡也、為『玉樹後庭花』、斉将亡也而為『伴侶曲』、行路聞之、莫不悲泣。所謂亡国之音。」と語り、前朝の亡国の音を危険視したのに対して、太宗は、それは聞き手の置かれた時代の状況によって変わるものであって、曲自体には問題ないとして、「今『玉樹』、『伴侶』之曲、其声具存。朕能為公奏之、知公必不悲耳。」と語ったという話にもよく表れている。太宗は亡国の音として非常に名高い陳後主の「玉樹後庭花」の演奏すら拒まなかったというのである。

太宗のこのような態度は、一つには天下統一に対する自信・余裕の表れとも考えられる。しかし同時に、そこには南朝（あるいは南方）出身者に対して、南朝王朝の完全な消滅を既成事実として再認識させるという意図も見え隠れしているように思われる。いわば寛容さの陰に隠れた無言の圧力を彼らに感じさせることが、太宗の真意ではなかったろうか。事実、南方出身の詩人たちは、太宗が南朝文学に同情的であったにもかかわらず、極めて自己規制的、自己否定的であった。李百薬は、太宗によって編纂を命じられた『北斉書』の「文苑伝序」において、自らを育んできた南朝文学を「乃眷淫靡、永言麗則、雅以正邦、衰以亡国」と断じざるを得なかった。また虞世南も、かつて太宗が「宮体詩」を作り彼に唱和するよう命じた際、「聖作誠工、然体非雅正。上之所好、下必有甚者。臣恐此詩一伝、天下風靡。不敢奉詔。」と諫めたという

（『新唐書』「虞世南伝」）。ここでの「宮体詩」とは、言うまでもなく斉梁体のような南朝風の詩ということである。興味深いのは、その虞世南の言葉の後につづく太宗の反応である。「朕試卿耳。」と太宗は語ったというのである。虞世南が、自ら顧野王に学んだ南朝文学のいわば「正統」な後継者であったことに対して、後ろめたさを感じているであろうことを見透かしての、太宗の言葉であろう。虞世南にとっては冷や汗ものであったにちがいない。

このような状況を踏まえた上で、再度「帝京篇」製作の太宗の意図と、その意図を察知した当時の宮廷詩人らの反応を考えた場合、貞観以後、都市を歌う詩がどのような変遷を遂げていくか、容易に想像がつくであろう。まずは長安城（帝都）讃歌の詩が増えて行くであろうこと。事実、この時期、宮中の宮殿や御苑を賛美する応制詩が急増しているし、やや後になるが、駱賓王「帝京篇」や盧照鄰「長安古意」などの長安を歌う長大な雄篇が誕生するのも、この流れに沿ったものと言えるであろう。[9]

そして第二に、他の都市を歌う場合、微妙に「配慮」が必要になって来たであろうということ。とりわけ、かつて王朝の都となったことのある都市の場合、抑制的、否定的な歌い方にならざるを得なくなったであろうということ。やや飛躍的な言い方になるが、なぜ唐代において都城懐古の詩が爆発的に多くなるのかという理由も、この国家権力の志向性と関連づけて考える必要があるように思われるのである。すなわち、詩人は現代でなく過去に重点を置いて書くしかなかったのかも知れない。少なくとも太宗の時代、「王気」の所在がなお詮議されている金陵が、極めて歌いづらい状況にあったことは間違いないであろう。

四、小結〜徐敬業の乱と「金陵王気」

つづく高宗期（在位六四九〜六八三）における金陵は、一地方都市に格下げされたとは言え、他の江南諸都市と同様、

兵乱もなく比較的平穏であった。むろん北方への飢饉の際の食料援助や、有事の際（たとえば高句麗征伐）の軍事物資の補給などの負担を考えれば、江南地域の生活は必ずしも楽なものではなかったであろうが、それでも緩やかではありながら、しだいに江南の経済力は増していったものと考えられる。[10]

しかしその平穏は再び破られることになる。高宗崩御の翌年（六八四年）九月、徐世勣（李勣）の長孫・徐敬業（李敬業）が、朝廷を壟断していた武則天に対して反旗を翻す。世に言う徐敬業の乱である。『資治通鑑』「則天順聖皇后」「光宅元年九月」には次のようにある。「時諸武用事、唐宗室人人自危、衆心憤惋。会眉州刺史英公李敬業及弟盩厔令敬猷・給事中唐之奇・長安主簿駱賓王・詹事司直杜求仁、皆坐事。敬業貶柳州司馬、敬猷免官、之奇貶栝蒼令、賓王貶臨海丞、求仁貶斈令。求仁、正倫之姪也。盩厔尉魏思温嘗為御史、復被黜。皆会於揚州、各自以失職怨望、乃謀作乱、以匡復廬陵王為辞。」と。

徐敬業らが、当初、揚州に結集したという点が、まず興味を惹く。揚州は大運河と長江の合流点であるため、食料などの物資を集めやすく、また揚州大都督が置かれていた軍事的要衝であるため、兵力を集めやすかったという利点もあろう。いずれにせよ、「一揚二益」と称され、唐代を通じて最も繁栄した商業都市と言われたその実力が、すでにこの当時において認められていたことを示す出来事である。

しかしこの反乱は、挙兵当初における進軍方向に対しての選択ミスによってあえなく失敗に帰することになる。またもや亡霊のごとく現れる「金陵王気」の魅力に徐敬業は惑わされたと言える。『資治通鑑』は次のように記す。参謀の一人魏思温が徐敬業に対して「明公以匡復為辞、宜帥大衆鼓行而進、直指洛陽、則天下知公志在勤王、四面響応矣。」と、大義名分の上でも直ちに洛陽（当時の都。神都と改称していた）を直撃すべしと進言したのに対し、今一人の参謀薛仲璋は「金陵有王気、且大江天険、足以為固。不如先取常・潤、為定霸之基、然後北向以図中原、進無不利、退有所帰。此良策也。」として、金陵の「王気」と「天険」を根拠に、渡江して南進すべしと反論する。この薛仲璋の悠長な戦術に徐敬業は同意

し、兵力を割ってまでして揚州の南岸に当たる潤州攻略を命じてしまう。結局、その間に南下してきた官軍に揚州北部で大敗し、この反乱はあえなく鎮圧されてしまう。魏思温は後に友人に対して、「兵勢合則強、分則弱。敬業不并力渡淮、收山東之衆以取洛陽。敗在眼中矣。」と感想を漏らしている。

また、『資治通鑑』の編著者司馬光も、わざわざ唐の歴史家・陳嶽の「敬業苟能用魏思温之策、直指河・洛、専以匡復為事、縱軍敗身戮、亦忠義在焉。而妄希金陵王気、是真為叛逆、不敗何待。」という論評を引いている。すなわち、この選択の誤りには、単に戦術的な判断の誤りだけでなく、象徴的なレベルにおいても重大な判断ミスが存していたと、その軽率さを批判しているわけである。つまり、徐敬業の真意はどうあれ、「金陵」を目指した時点で、すでに唐王朝を否定し、新たな王朝を建設しようという国家転覆の意図を表明したということを意味してしまうということである。換言すれば、「金陵」という名を出してしまえば、それだけで王権の帰趨という問題が前景化してしまうということである。

ふりかえって見れば、むろん薛仲璋・徐敬業がどこまで本気で「金陵の王気」なるものを信じていたか、あるいはそこに王朝転覆の意図が存していたかについては、はなはだ疑問である。しかし軍略会議という場においてさえ、この「王気」なるものが他者を説得するための「口実」となり得ていたこと自体、問題であろう。「金陵の王気」という言葉には、それほど甘い誘惑めいた響きが存していたということだけは事実である。

以上のように、陳朝滅亡後約百年、なお「金陵の王気」は健在であった。それは見方を変えれば、唐王朝の金陵に対する「危険視」も健在であったことを意味する。金陵を舞台とする文学がなかなか目覚めなかった理由も主としてここに有ろう。しかし、このような状況下にあっても、その萌芽はすでに始まっていた。徐敬業の乱の直前、反乱に加わり露と消えた駱賓王とともに「四傑」の一人に数えられる王勃が、すでに、かすかではあるが唐代金陵詩文の開幕を告げていたのである。その点については、また稿を改めて論じることにしたい。

注

(1) 拙論「金陵詩史における李白の意義（一）～李白詩に見える金陵の地名」（『中国詩文論叢』第二六集、二〇〇七年）を参照。李白詩のうち詩題・詩中・詩序に金陵の地名が含まれる作品は五十八首に及ぶ。

(2) 呂武進・李紹成・徐柏春『南京地名源』（江蘇科学技術出版社、一九九一年）p一一脚注を参照。

(3) 石頭城については、たとえば『元和郡県志』に「呉大帝修築、以貯財宝軍器、有戍」とある。戦乱時、金陵をめぐる攻防の際には必ずと言ってよいほどここが争奪の場となっている。

(4) 「金陵の王気」に関わる六朝時代のエピソードについては盧海鳴『六朝都城』（前掲）「第一章・第四節・三、金陵王気的伝説」に詳しいが、本書においては隋代から唐代に至るエピソードについては触れられていない。本稿ではその六朝以後のエピソードも補っていくつもりである。

(5) 陳末から唐初の輔公祏の平定にいたるまでの江蘇省一帯の歴史については江蘇社会科学院「江蘇史綱」課題組著『江蘇史綱・古代巻』（江蘇古籍出版社）が簡便で参考になる。

(6) 複雑な隋唐時代の金陵の行政区画上の変遷については、『南京地名源』（前掲）、楊国慶・王志高『南京城墻志』（鳳凰出版社、二〇〇八年）が参考になる。

(7) 太宗の文学における南北融和については、張采民『融合与超越～隋唐之詩歌之演進』（江蘇文芸出版社、一九九七）等を参照。また太宗期の文学論がいかに六朝文学論に強い影響を受けていたかについては、古川末喜『初唐の文学思想と韻律論』（知泉書館、二〇〇三年）「第Ⅱ編・第二章　初唐歴史家の詩文発生論と創作論」に詳しい。

(8) 太宗の作品が「浮靡」「頽靡」あるいは「纖巧」と評されてきた歴史的経緯については、陳文華『唐詩史案』（上海古籍出版社、二〇〇三年）「第一編　唐詩始制　貞観詩風浮靡辯」に詳しい。

(9) 私見に類する指摘として李徳輝『唐代文館制度及其与政治和文学之関係』（上海古籍出版社、二〇〇六年）「第三章　初唐文館（上）」に、「……比如只有在初唐詩中纔常常見到的帝京題材、就是太宗君臣的創造。帝京題材的出現和熱門不是偶然的、蓋国運推移、治乱循環、自六朝破滅後、『金陵王気黯然収』、唐承隋祚、国運方隆、華夏民族歴三百余年動乱後重帰一統、国家将臻極盛、

長安這箇八大名都、為盛気之所聚、帝宅皇居、宮殿巍峨。」とある。天下統一の機運に乗じた太宗およびその臣下らの帝都を詠じる作品に刺激されて、以後帝京を歌う作品が多くなったという指摘である。

(10) 唐初の江南地区の経済及び人口の状況については翁俊雄『唐初政区与人口』(北京師範学院出版社、一九九〇年)、同『唐代区域経済研究』(首都師範大学出版社、二〇〇一年)に詳しい。唐代江南地区の飛躍的発展は、すでに唐初から始まっていたことがわかる。

(文学部・文学研究科教授)